

私は「眼聴耳視（げんちようじし）」という言葉を手紙で学びました。眼で聴き、耳で視る、というこの不思議な言葉は、ある経文の一句であって、あらゆる事柄の本質を見透かす心の姿勢をといっているものであります。失明二十五年、音をたよりに生きてきた私にとって、この耳で視る、という一語は、日常の実感でありましたので、思わず共鳴し膝を打ちました。特に失明とともに私たちが持っている手足の後遺症には、ハンセン氏病特有の知覚麻痺がともなっておりますので、その不自由度は意外に高いのでありますが、これほどの病気がなければ、耳と脳をおかさなかったということから、聴く、味わう、考える、記憶するなどの働きが、本来の人間性を失わず、その能力を発揮しうる最良の機能であることを、あおとり楽団という具体的な音楽活動を通して教えられてきたのであります。それはまた好きという一点だけで結束した一部晴眼者を含む十数名の重障失明患者が、それかなり衝動的本能的に、あるいは長期療養生のなかの閉された時間と孤独からの逃避であったかもしれないといたしましても、音楽という花を咲かせるためにあえて困難に立ち向い、励まし合い、多くの善意に支えられながら、ひとつの可能性を発見したという貴重な体験でもあります。

発見した可能性……それは為せば為る、という確信であり、生きることの喜びであります。すべてを奪いとりうとしたはずの病気が、実は一方で生甲斐への道をひらいていたという、それは一編のドラマにも似ている私には思えてなりません。この意味で「あおとり」の音楽はその技術ではなく、そこにこめられている感動の純度こそ問われるべきものではないかと反省するのであります。

盲目の譜

人間の

ものを見るという不思議

見えないという不思議

これこそ

神の傑作……

というべきでありましょう